

リンパ系腫瘍の診断は、おまかせ下さい！

リンパ腫はイヌで発生頻度の高い悪性腫瘍です。しかし、化学療法が奏功する数少ない悪性腫瘍であることから、的確な診断・治療により長期の寛解期間が得られます。ケーナインラボでは、リンパ腫の検査が充実しています(クローナリティー解析、リンパ球表面マーカー解析、細胞診、病理組織学的検査)。診断に迷う場合には、是非ご活用下さい。2013年6月の獣医臨床病理学会で発表したデータを掲載します。

方法

細胞診でリンパ腫(リンパ芽球の著しい増殖:低分化型リンパ腫)と診断されたイヌ52症例を用い、リンパ球表面マーカー解析とクローナリティー解析を実施し、両解析の検出率とT/B分類を比較した。

結果と考察

表1)リンパ球表面マーカー

検査結果	症例数	検出率	
Bリンパ球の腫瘍性増殖	35/52	67.3%	} 86.5%
Tリンパ球の腫瘍性増殖	8/52	15.4%	
リンパ球の腫瘍性増殖 (T/B分類は不可)	2/52	3.8%	
腫瘍性増殖とは断定できず	7/52	13.5%	

表2)クローナリティー解析

検査結果	症例数	検出率	
Bリンパ球の腫瘍性増殖	35/52	67.3%	} 94.2%
Tリンパ球の腫瘍性増殖	8/52	15.4%	
異常は検出されず	3/52	5.8%	

表3)T/B分類の比較

表面マーカー	クローナリティー	症例数	割合
Bリンパ球 35症例	Bリンパ球	33/35	94.3%
	Tリンパ球	0/35	0%
	検出されず	2/35	5.7%
Tリンパ球 8症例	Bリンパ球	0/8	0%
	Tリンパ球	7/8	87.5%
	検出されず	1/8	12.5%
腫瘍性増殖 T/B分類は不可 2症例	Bリンパ球	1/2	50.0%
	Tリンパ球	1/2	50.0%
	検出されず	0/2	0%
腫瘍性増殖とは 断定できず 7症例	Bリンパ球	2/7	28.6%
	Tリンパ球	5/7	71.4%
	検出されず	0/7	0%

リンパ球表面マーカー解析とクローナリティー解析の検出率は、それぞれ86.5%(表1)、94.2%(表2)であった。これらの結果より、どちらの検査も感度に優れた検査であることが示された。

T/B分類の比較では、リンパ球表面マーカー解析によりBリンパ球の腫瘍性増殖と判定された35症例のうち、クローナリティー解析によりBリンパ球の腫瘍性と判定された症例は33症例(94.3%)であった(表3最上段)。Tリンパ球の腫瘍性増殖と判定された8症例のうち、クローナリティー解析によりTリンパ球の腫瘍性と判定された症例は7症例(87.5%)であった(表3上から2段目)。T、Bともに高い確率で両検査の結果が一致していることから、どちらの検査も精度よくT/B分類が行われていることが示された。

最後に、表3の結果から52症例のうち、どちらの検査を実施しても腫瘍性増殖が検出されなかった症例は存在しなかった。この結果は、両方の検査をすることで腫瘍性増殖を見逃す確率は非常に低くなることを示唆している。

検査名

特徴

クローナリティー解析

非常に微量な検体、細胞診用のスライド標本(染色・封入済)から検査可能

リンパ球表面マーカー解析T/Bセット

検体受取後、2~3営業日以内に報告

病理組織学的検査

細胞診では診断の難しい高分化型リンパ腫の診断も可能

細胞診

針生検により作製された塗抹標本から評価が可能

株式会社 ケーナインラボ

〒184-0012 東京都小金井市中町2-24-16農工大・多摩小金井ベンチャーポート302号

電話:042-401-2291(代表)、042-401-2294(検査室)

FAX:042-382-7384(共通)、E-mail:kensa@canine-lab.jp

